

## 紹介

### ●圖 書

#### ●國史に關するもの

●和歌史の研究 文學博士 佐々木信綱著

大日本學術叢書の第三編として發行せられたるものなり。本書は著者が従前、歌學史又は和歌史の方面に於てなし遂げたる成績を集めたるものにして、初めより一編の書として執筆せられしに非ざるを以て記事繁簡重複ありと雖先づ一貫せる和歌並に歌學の歴史的研究なり。本書は之れを分ちて三編となし、上世、中世、近世に排列す。第一編に於ては第一章上世の歌謠、第二章萬葉集、第三章風土記の項とし其の中萬葉集の研究は、量よりするも全體の約四分の一を占め、著者の最も得意の章にして、又多大の興味あるところなり。萬葉集概観、萬葉集第五卷論以下廿二項に分たれ叙事詩人高橋蟲屋の評論、萬葉註釋書、古本萬葉集の發見、仙覺、契沖の事蹟、水戸家と萬葉集、外人の萬葉集翻譯等の記事あり。第二編は第四章「神樂催馬樂」に始り、「古今集時代」「今樣及雜纂」「新古今集時代」「中世新派」等の章あり。其中には日本紀歌註の新

發見若宮社歌合後序によりて顯昭の年齢の考證、梁塵秘抄の完本出現に對する希望、新古今集歌風論建禮門院右京大夫のこゝなとの興味ある記事あり。第三編に於ては「近世歌風」以下三章を收め戸田茂睡、下河邊長流、僧契沖等が擧げた革新的聲及び近世歌風に新らしき個人的特色ある事の賞讃、又傳授思想破壞者の第一人は竹林齋三之なる事の主張、其他眞淵宣長久老春海より以下幕末詩人等の歌風及び其等の歌論の論評あり、最後に附録として明治四十三年春及夏著者が京畿地方に於ける「探蹟記」を收めたり。歌學史の資料、彰考館の古書の探訪等何れも和歌史研究者を裨益すべき文字なり。(大日本學術協會發行、價一、六〇)

●田沼時代 文學博士 辻善之助著

本書は日本學術普及會より發行せる「歴史講座」の第二編なり。徳川幕府の季世、田沼意次が權勢を擅にしたる時代を中心として編述せるものにして意次の專權、當時役人の不正、士風の廢頽、風俗の淫靡、天變地妖、百姓町人の騷動、財政究迫と貨幣の新鑄、開墾、座、運上、田沼の没落、新氣運の潮流、蘭學の發達と開國思想并貿易政策の十一章を設け以て當時代の政治社會一般文化狀況を説きたるものなり。もと「歴史講座」刊行の趣旨は一面歴史の研究及び其趣味の普及を企圖するにありたるを以て、本書も亦叙述平易簡明、且つ趣味ある挿話を多方面に互りて採れるは讀者の最

も喜ぶところなるべし。

尙本書が、例言に記して、書中述ぶる所は悉く皆出所の明かなるものにして従來公にせられたる先輩等の著述に見ゆる面白き事實も其の出所の明確ならざるは採らずと言へるは方に著者が本書編述の用意を察すべきなり。

本書緒言によれば、大正初年の政治界が田沼意次の時代と類似せりと云ふ世評が果して純粹學術の見地より如何に批判せらるべき乎と云ふ問題、時勢の推移に當りて政治家の施政方策が如何なる程度まで影響するものなりやと云ふ疑問は著者をして此田沼時代の研究に入らしめたる動機にして其結果が本書なりとの事なれども本書は是等の問題を當面に解決すべきものにはあらずして寧ろ冷靜なる史家が應用的立場を離れて忠實に此田沼時代を描けるものと見るべき著作なり、田沼が將軍の寵を固むる手段、勘定奉行の收賄、田沼の財産、將軍家治との關係、佐野善左衛門の意知殺害事件、土風の廢類、當時上下の風紀、連續し來れる天災地妖、物假の騰貴、庶民の困窮、田沼の財政策等に就て正確にして興味ある資料を多方面に蒐め來る處に大に價值あるものなり。殊に第十章「新氣通の潮流」に於ては此時代の暗黒裏尙一道の光明の閃々たるものあるを言ひ、思想の自由、學問の隆興、文藝の發達を説き第

十一章「蘭學の發達と開國思想并貿易政策」に於ては特に時代の新

學即ち蘭學の流行、對外思想及び其政策並に其方面に於ける先覺者を叙し其後に享保時代と田沼時代との比較をなせる點等は本書の最も意を用ひたるところなるべし。最後に、著者は田沼を評して、田沼は寧ろ同情に値するものにして、彼れは政治上の大手腕を具へたるが高遠の理想なく、政治的真心の缺乏せしと、徳望の伴はざりしことにより、一代の政治を過らしめたるものなり、其の度量と手腕は之れを認めざるべからずと言へるは、既に幕末に於てかの川路聖謨が田沼を評せること全く揆を同うせるものなり。本書中「内安録」によりて本多忠明の田沼意次の果斷を評せる條あれども聖謨の評は見ゆるが如し。此れは忠明の夫れよりも興味あるものなれば、筆の序に聖謨の「游藝園隨筆」より左の一節を引かん。

越前守殿御在役の間、或時某の御物語の序、近來執政の人の優劣を評し可申旨申されければ、某申上ぐるには、田沼主殿頭殿の御事世によるしからず申候得共、餘程の豪傑におはしけり。只今草寛の御政事に御改正の時に向ひて申さんはいかの様に似たれ共、主殿頭殿も御側御用人より御老中に成せられ候初は、必ず世にも賞し奉り候御人にこそ候へき。……右御政事は餘程宜しく出來たる様に存せられ候は其頃の書物を一覽候ても判然の義に御座候……然るに上の御覺もよろ

しく、天下靡かすといふ事なきに至りていつか驕慢の氣起りて其弊終に松本伊豆守が如き利口にて即應御用辨よろこきもを用ひられ候故、御用は足候得共、無望なる事のみ多く、人しらす人望を失ひて、終りには世にも疎み果られて、天明末年の姿とはならせられけり。

今の人は主殿頭殿令落なりたるに依て、奢侈賄賂のとは田沼時代なごいひて、主殿頭殿を以て骨髄よからぬ人の如くにいふは、氣の毒千萬なるご被存候……其當時目前の御益のみに流れ行て主殿頭殿の事業も大事衰るもの歎ご被存候ご述たる處至極尤なる事ご申されたりけり。(日本學術普及會發行 價、八〇)

●光悦 光悦會編纂

本書は本阿彌光悦の人物遺業顯彰の目的を以て、創設せられたる光悦會の編纂にかゝり、三浦文學博士の嚴密なる校閲を経たるものなり。全篇を三卷に分ち、上卷の劈頭本阿彌家系圖、光悦年譜を掲げ、光悦の祖先より説いて、光悦の出生幼時に及び、更らに光悦の生活を詳説し、殊に光悦ご其周邊の人物を論じて、徳川初期のわが藝術界に於ける光悦の地位を彷彿たらしむ。中卷には光悦の藝術及趣好を説き刀劍鑑定家ごとしての光悦、入木道に於ける光悦、繪畫史上に於ける光悦より蘇繪、彫刻、制陶、鑄造、圖繪

茶道、謠曲、能樂、文學等光悦が多方面なる藝術的天才を考究して餘蘊なし。下卷には光悦既に洛中の住居に厭きて大徳寺の北麓に太虚庵光悦寺を經營するの事情よりその終焉に及び、最後に光悦の人物論を試み、其兄弟子孫に就て述ぶ。猶附録ごして光悦に關する現今學者の研究感想錄等を附せり。全篇四百二十頁餘の和装せる美本なり。

蓋し光悦の傳を記せる著書既に一二に止まらざれども、能く本書の如く其傳記を學術的に考證討究し、正確なる記述をなせるものなし。本書は毎章本文の下に其引用文をも載せれば一部の傳記にして又其資料集を兼ねたり。世人はこの書に據りて近世に於けるこの大藝術家の面目を窺ふを得ん。(芸艸堂發行 價三、〇〇)

●日本と和蘭 日蘭協會編

本書は大正三年蘭領爪哇スマラン市に於て博覽會開催の舉あるに際し、日蘭協會が其一事業ごして編じたるものにして、邦文、英文の二種あり。其前編は東京外國語學校長村上直次郎氏の執筆に係り、日蘭三百年の親交ご題し、後篇は同校教授松本義顯氏の執筆に係り和蘭の現状ご題す。即ち本書は日蘭の親交を史的關係より見、又現狀より觀察したるものにして、殊に村上學士は日蘭交渉史の研究既に久しく、此方面に於ける權威たれば其内容の的確なるご云ふまでもなく、而もよく其要を採りて簡潔に記述せら

れたり。後篇和蘭の現状は和蘭王國、蘭領東印度、ジャバ島、外領の四部に分ち地理的、經濟的、政治的各方面に亘り稍詳細なる説明を加へられたり。世人はこの書に據りて極めて正確に日蘭兩國の關係を闡明にすることを得べし。(日蘭協會發行、價一〇、〇〇)

●夏、日本 文學博士 久米邦武著

明治四十五年夏、山陰鐵道開通の際、出雲大社參詣を試みし著者が到る處地勢を叙し、歴史を談し、地方傳説の誤を正したるものにして、「裏日本」の國史上に於ける地位を明かにせるものと云ふべく單純なる紀行にあらず。本編は卷を分つ事六、第一卷「丹波國」にては、桑田郡は秦氏が桑を植ふる田野の意に非ず、絹織は秦氏來朝以前より我國にありしと主張し、第二卷「但馬國」にては天日槍渡來の順序を述べ、第三卷「出雲國上」に於て上古倭韓一國なりとの持論を力説し、第四卷「出雲國下」に於ては同國の歴史地理を説き、出雲の舊族と海賊、穢多の起り、出雲語部の由來等の民族研究上の意見を語り、第五卷「伯耆國」にては八岐大蛇は越人にして大山祇は當國に於ける大藩主なるべしとて、叢雲神劍を伯耆鐵なりとし、第六卷「因幡國」にては鹿野城址、氣多の遊岐島加露の沙濱、鳥取の興廢等を説ける中に「山陰の古代」として、山陰道人士の生命の海上にあるを注意し、汽車開通の利弊を論じて

「裏日本」のために一清涼劑を與へたり。(公民同盟出版部發行、價一、五〇)

●船井郡誌 川島元次郎編

京都府船井郡の由來沿革を説きて現状に及ぼせるものにて二編より成る。第一編は通誌として位置、面積、人口、地勢、氣候、交通、郡治沿革以下、産業、教育の沿革、財政、社寺を記し、第二編を町村誌として關部町及團部村を始め郡内廿二町村の沿革、産業、教育、社寺、名勝舊蹟、名士等に就て詳説し、勤王烈士湯淺五郎兵衛事蹟、參照古文書、團部領御直禮並に帶刀人由緒の三項を附録す。地圖の挿入せられざるは惜むべし。(菊版三六四頁、船井郡教育會發行、非賣品)

●豊橋市及其附近 大口喜六著

本書は御大禮記念事業の一として、豊橋市教育會の發行に係るものにして、豊橋市の歴史の沿革より現時の状態に至るまで、詳しく、且つ面白く記述せられたり。豊橋市を一般に紹介するには恰好の著述なるべし。(豊橋市教育會發行、價、五〇)

●光琳圖錄 山田芸艸堂發行 (價五、〇〇)

●列聖全集(後柏原院御百首部類、後柏原院詠百首和歌、後柏原御集拾遺、後奈良院御製集、同御百集、同御製拾遺、正親町天皇御製、正親町院御百首)(列聖全集編纂會發行、非賣品)

●日本經濟叢書第二十卷(本朝地方春秋、封事、勸農或問、農政座右、井田集覽、商道九篇國字解、勸農策)

●同 第二十一卷(田租考、平理策、破れ家のつゞり話、制沂源考、經地解義、譬稻性辨、經典穀名考、田園地方起源、濟時七策、齋庭の穂)(日本經濟叢書刊行會發行、非賣品)

●日本偉人言行資料(昔咄) 慶勝公履歷附錄 國史研究會發行 (價一、〇〇)

●同 (桃源遺事、西山遺明)

●同 (有斐錄) 同 (同)

●同 (先哲叢談上) 同 (同)

●榮西禪師 木宮泰彦著 丙午社發行 (價一、〇〇)

●大日本史料 第十二編之十八 東京帝國大學史料編纂掛發行 (價三、〇〇)

●史料通覽(中右記四・五) 日本史籍保存會發行 (非賣品)

●葛原勾當日記 葛原箇編 博文館發行 (價二、二〇)

●海錄 山崎美成著 圖書刊行會發行 (非賣品)

●解題叢書 同 (同)

●信貴山緣起 山田芸艸堂發行 (價二、〇〇)

●蒙古襲來繪詞 風俗繪卷圖書刊行會發行 (價三、〇〇)

●九條尚忠文書第一 日本史籍協會發行 (非賣品)

●校定近江輿地志略 小島捨市校 西濃印刷株式會社出版部發行 (價三、〇〇)

●大日本地誌大系(斐大後風土記上) 大日本地誌大系刊行會發行 (非賣品)

●同 (三國地誌上) 同 (同)

●訂正大日本時代史(幕末) 小林庄次郎著 增補大日本時代史(幕末) 早稻田大學出版部發行 (非賣品)

●同 (德川下) 池田晃淵著 (同)

●同 (南北朝) 久米邦武著 (同)

●名古屋市史(政治編第一地圖) 同 (同)

●名古屋市役所發行 (非賣品)

●日本歷史通覽 高桑駒吉著 實業之日本社發行 (價四、〇〇)

●國史叢書(越後軍記、昔日北花鎮、淺井物語) 國史研究會發行 (價一、〇〇)

●同、古郷物語、大友公御家覺書、從道鑿五代記

同

●同、上州治亂記、上州坪号老談記、上州金山軍記

新田正傳記、新田正傳或問

同

東洋史に關するもの

●支那論集 全 文學博士 市村瓚次郎著

大正五年一月八日發行に係る。此書は著者が明治四十二年以後の支那問題に關して雜誌又は講演にて公せしものを纂輯したるものなり。總紙數三百十七頁、其内容は之を九節に分ち支那の國民性支那革命論、支那革命に對する歴史的觀察、歷史上より觀たる湖北省の地位、支那の分裂と統一、支那の診斷、中華民國の前途、支那國都論、明代の滿洲と論述し、附録として、國家統一の要素に就いて、日韓併合と精神的統一、國家盛衰の機を論ず、平和と戰爭の四篇を添ふ。何れも總論的の記述なれば該博なる知識と根底ある識見あるに非ざれば爲し得ざるもの苟くも支那學に志す者の一讀を要す。(富山房發行、價一二〇)

●恒農家墓遺文一卷 羅振玉輯

本書は今より凡そ十年前、清國河南省靈寶縣にて發掘せし漢代罪人の篆墓の甄文三十一種を勾勒板刻せるものにして、靈寶は古の弘

農郡の地なり。此中二十一は死没の時期、東漢章帝の元和四年

改章和元年(西紀八十七年)より靈帝熹平元年(西紀百七十二年)に

亘りて大抵その年月日を明記し、他は年代不明のものなり。その

刑徒の籍里は京兆、左馮翊、潁川、豫章、陳等の各地に跨り、罪名

には髡鉗、完城旦、鬼薪、司寇等ありて、例へば「永元元年四月

四日左馮翊萬年髡鉗畢通死在此下」等の如く、長方形の甄に方二

寸位の八分書にて二三行に列記せり。蓋し是等各地の刑人は多く

大工事の際などに遠近より召集使役せられしものにして、その死

去の時一々斯くの如き甄を以て標示せしものなるべし。是により

て當時罪徒の待遇法を知り得べきは勿論、依て以て漢代の書體并

に字句の用法(死屍相通することなど)をも觀取するに足るべき究

竟の史料なり。而して以上三十一甄の中既に尙齋職甄記に見ゆる

もの二十有三あれども尙齋の著録には譌舛多きを以て、本書に就

て見るを可とす。尙ほ羅氏は此外同様の甄文七十種の墨本を有し

中に東漢明帝永平年中のものありといふ。

●漢晉石彫刻墨一卷 羅振玉輯

本書は十數年前雲南省にて出土せし西漢成帝河平四年(西紀前二十五年)建立孟璇の殘碑を始め漢代の碑銘題字凡そ十種、魏晉のもの凡そ六種の文字を鈎勒輯載せるものにして、中に有名なる魏の丸部紀功刻石あり。何れも羅氏が先輩の諸書の粗工拙刻に餘ら

すして精密に筆意をも傳照せしめたるものなれば、史家は勿論、  
隨地家の必ず據て以て大に參考に資すべきものなり。

●曲阜碑碣考四卷 孔祥霖撰

近世曲阜の碑碣を録せるものに、阮元の山左金石志、孔繼汾の闕  
里文獻考書ありと雖、前者は遺漏多く且元代に至つて止め、後者  
は典禮を主としたれば碑刻は藝文中に點載せるのみなり。稍後れ  
て孔照燾の至聖林廟碑目あり。博搜蒐羅して道光に至れりといへ  
ども林廟に限るが故に嬰相圃の漢の二石人、類氏樂圃の漢竹葉碑  
の如きは皆録せず亦誤少からず。依て孔子七十五代の孫祥霖は本  
書を編して曲阜城の内外に在る碑碣を備載し、之を四卷に分ちて  
第一卷には漢より隋に至り、及び唐宋の佳なるもの四十五種を舉  
げ、第二卷にはその餘唐宋より明清に及ぶまで廟中に散置せるも  
の四百五十二種を録し、第三卷には至聖林著聞の碑二百三十四種  
を記し第四卷には城外坊里の諸碑二百四十六種を示し、時代の先  
後と配置の地とを按じて類別を立て、一々書體年月所在を明記し  
たるを以て甚だ捜査に便なり。然れども著名なる碑文等をも一切  
省略に従へるは遺憾少からず。

●三吳舊語 顧峇撰

顧峇(字は云美)は明の遺臣にして、帝室の流賊に滅ぶるや跡を江  
湖に放ち特に規畫する所あり。當義師東南に通く吳日生沈君晦等

方に旗を吳中に樹てしかば、云美乃ち邗邳の舊史を博引して本書  
を編し、吳越以來明師定鼎に至る迄吳地の説話を蒐めて三十三章  
となし、各論斷を附して東南の西北に勝れる所以を力言せり。文  
簡にして論議猶木だ書生の見を脱せずと雖往々他の史蹟に見ざる  
事蹟もありて亦史學に益なしとせず。殊に此刻本は書道に工なり  
し顧氏楷體の眞蹟を精贍せるものなれば此方面よりも尊重すべき  
良書なり。

●謀洲觀 全 文學博士幣原坦著

實文館發行 (價二、二〇)

●西洋史に關するもの

●F. Hockett: Ueberblick ueber die Welt-

gesch. hichte. (Berlin, 1914)

世界史的見地に立つて過去の歴史過程を達觀することが、現代の  
歴史教育上必要なるは云ふ迄もなし。本書は著者が最近に於け  
る史學の進歩、殊に古代史の闡明と現時の世界史的な大勢とに鑑み  
て、簡潔なる世界史概觀とも稱すべき著述の必要なるを察し、公  
にせるものなり。第一章太古石器時代より第二十六章現代迄世界  
史の時代を二十五期に分ち、各時期に於ける東西諸邦土の史的變  
移を概説し居れり。されば一章中に於て、西歐の舞臺を叙せる筆  
路は轉じて西方亞細亞に移り、更に中亞、印度の形勢に及び、途

に遠く極東の天地を觀察するに至る、眞に eberlick の名に背かざるなり。而して叙説は各方面の概観に止まらずして、往々其相互關係文化の交渉に及べるを以て、讀史家の眼識を雄大ならしむるに於て、功大なりと云ふべし。但し其取扱へる範圍廣大にして論叙古今東西に亘れるが故に、其間首肯し難き不穩當なる説述なきにあらず、極東に關する叙説の如き殊にしかるを覺ゆると雖も、こは蓋し己むを得ざる所と云ひつべし。而も吾人は本書が通篇約六百頁の殆ど半ばを古代史に費し、東西各邦土の史的發展が愈々相混和包含して、世界史的形勢漸く現出し來れる近世以後の時代に就いての論述が比較的簡略に過ぎしを惜まざるを得ざるなり。

●H. Mattingly: *Outlines of Ancient History.*  
(Cambridge, 1914)

本書はケムブリッジ大學より出版せらるべき歴史綱要三巻の一にして、古代史要として甚だ恰好の著たるを失はず、篇中數十葉の鮮明なる寫眞版並びに十餘の地圖を挿入し、且つ巻尾にアレキサンダー大王没後の東方諸國王表及希臘系の古泉寫眞版を附せるは有益なり。全篇十章より成り、「歴史の發端」より筆を起して西羅馬の滅亡に結末を置けり。而も著者は主として力を希臘羅馬史に注ぎ、古代東方諸國史の如きは頗る簡略なる記述に止めたり。

これ本書が政治史的傾向の過重なるに由らんか。著者は Eduard Meyer に私淑すること深きが如く、同氏の史代史を最も尊重すべき標據となせしは勿論卷頭の序説に歴史の性質を論ずる所 Meyer の政治史的態度と其見を一にせり。(マイヤー氏の古代史第一巻の一、二版)一八二頁以下参照)而して著者が本書編述に際し主要なる參考となりしものは前記マイヤー氏の古代史以外 Bloch の希臘史 Mommsen の羅馬史 Hermann Schiller の羅馬帝政時代史 Heiland の羅馬共和國 Bury の羅馬帝國及後期羅馬帝國の諸名著にあるは氏の緒言によりて知らる。

●K. Bell: *English History Source Books.* Vols. 18  
(London, 1913)

本集は英國史を學ぶ學生に對し教科書と並用して、史實確定の根據となるべき正確の材料を供給し學習の興味と實益を増さしめんが爲に編纂せられしものなり。收むる所各時代の記録、年代記、文書、日記、傳記、詩歌の類、近代に及びては新聞、年鑑、議會議事録等を廣く引用し居れり。ラテン其他古文の史料は盡く平易なる現代文に改められたるは勿論なり。編纂の體裁は英國史上の重要な事項を年代順に排列し、これに必要な史料を附し且つ勉めて其出所を明かになし居れり。而して是等の諸事項は一般の通弊たる政治史方面に偏せずして問々社會的方面にも亘れるは喜

ぶべし。今新著せる既出十八巻の表題びに編輯擔當者を註ぐれば  
次の如し。

- 449—1066. The Welding of the Race. by John Wallis.
- 1066—1154. The Normans in England. by A.F. Huard.
- 1154—1211. The Angevins and the Charter. by S.M. Toyne.
- 1216—1307. The Struggle for the Charter. by W.D. Koljeson.
- 1307—1399. War and Misrule. by A.A. Locke.
- 1399—1485. The Last of Feudalism. by W. Garmon Jones.
- 1485—1547. The Reformation and the Renaissance. by F.W. Bawsher.
- 1547—1603. The Age of Elizabeth. by Arundell Esdaile.
- 1603—1660. Puritanism and Liberty. by Kenneth Bell.
- 1660—1714. A Constitution in Making. by G.E. Perrett.
- 1714—1760. Walpole and Chatham. by K.A. Esdaile.
- 1760—1801. American Independence and the French Revolution. by S.E. Winbolt.
- 1801—1815. England and Napoleon. by S.E. Winbolt.

- 1815—1837. Peace and Reform. by A.C.W. Edwards.
- 1837—1856. Commercial Politics. by R.H. Grelton.
- 1856—1876. Palmerston to Disraeli. by Ewing Harding.
- 1876—1887. Imperialism and Mr. Gladstone. by R.H. Grelton.

1563—1913. Canada. by James Munro.

● Franz Gramer: Römisch—Germanische Studien.

(Freslau, 1914)

歐洲中世を以て所謂暗黒時代なりとせし。これを以てクラシック文化とは全く隔絶せるものと考へ、かのルチサンスに至り初めて文運復活の曙光を認め、希臘文明の潮流を相通するを得たりとする舊來の認識は、最近の研究によりて一掃せられ、古代南歐の文化シゲルニ固有の原始的文化と相混和融合する所に中世史の眞意を認識せらるゝに至りしは、西洋史學の正當なる理解の上に甚だ慶賀すべき事なりとす。近時勃興せる Röm. sel. Germanische Studien がライム地方の古ゲルマニコに對する羅馬文化の影響に就いて考古學的に、將た文献上に、研究の歩武を進めつゝあるは斯學の爲に其効績著大なりといふべし。本書は這般の研究に造詣深き Gramer 氏が從來發表せる論文若くは未刊の原稿を撰集補訂し

て公にせるものにして、全部九章二十六篇の研究論文孰れも有益ならざるはなし。殊に第一章に於ける „Die Kulturstufe der Rhein-Germanen zu Beginn der Römerzeit.“ 及 „Die römisch-Germanische Forschungen ihrer Bedeutung für den Unterricht.“ 第九章中の „Römisch-fränkische Kulturzusammenhänge am Rhein.“ の如き諸篇は、考證的文字尠く、我邦人にも興味を興ふべきものなるべし。

● G. Jéquier : Histoire de la Civilisation Egyptienne. (Paris, 1913)

本書はNouchatel大學の埃及學教授として斯學に造詣深きJéquier氏の著はせる埃及文明史の好著なり。氏はかの埃及文明を „immuable“ のものとして其が不斷の史的發展を闕却し、且つこれを以て外界と隔絶せる孤立的の境遇にありしものなりとする固習的俗見を排せんと欲し、最新の研究により、この一小著中に於て該文明が各時代を通じて徐々に發展推移し來る跡を繰れ、更に其成果が隣邦に波及せる真相を索めて、それが世界文明史上に於ける位置を明かにせり。今其内容を一瞥するに、先づ第一章に史料を概説し第二章傳説時代の埃及より第七章新帝國に至る迄各章毎に歴史遺物文化の三部に分ちて一時代の真相を簡明に説述せられたり。書中多數の鮮明なる挿語は本文と相俟つて、讀者の感興を惹くこ

と多大なるべく、卷尾の Bibliographie は頗る有益なるべし。

● R.A. Stewart Macalister : The Philistines, their History and Civilization. (London, 1914)

本書は Macalister 氏が一九一一年十二月英國學士院に於て講述せるものを補訂して公刊せるものなり。かの舊約全書中に於て最も醜惡難思すべき民族として現されたる Philistines は、爾來聖書を讀む國民の間に全く文化に浴し得ざる劣等種族と目せられ、西歐諸國語に於て Philistine は仲間外れ「野郎漢」の代名辭となり。著者は近時の發見及攻究の結果に據りて、この誤られたる民族の有せし文明の真相を闡明せんと試みしものにして、先づ第一章に該民族の起原を説き第二章に其歴史を第三章に其土地を叙し、最後の第四章に於て彼等の言語、政治組織、軍制、家族制、宗教の各項に分ちて其文化の真相を述べ、終りに彼等が文明史上の位置を論じて編を結へり。

● A.J. Butler : The Tenty of Mistr in Tahari. (Oxford, 1913.)

Babylon of Egypt, A study in the History of Old Cairo. (Oxford, 1914)

この兩書は The Arab Conquest of Egypt の著者として、基督教傳布以後の埃及史に精通せる Butler 氏の研究論文なりとす。前

者ほかの Tabari 年代記に於ける Amr 埃及侵略の記事中に見ゆる Misr 和約に就いて、後者は同記事中の Babylon なる地名の沿革に關し、考證を試みしものにして、共にこの方面の研究者に於りて有益なる論文なりといふべし。

●西洋通史 三卷 文學博士 瀬川秀雄

富山 房 (價四、五〇〇)

●通俗世界全史(新民族勃興史)

早稻田大學出版部 (非賣品)

●同 (希臘史上)

同

●リツヒアルト、ツীগナー、田村寛真

岩波書店 (價三、八〇〇)

●耶蘇傳 上澤謙二 洛陽堂

(價一、五〇〇)

●カラツド、ストン傳 屋貫教、松本雲舟

三陽堂 (價一、五〇〇)

●歐洲大眼の經驗 大日本文明協會 (非賣品)

地理學に關すもの

●我が南洋 理學博士 山崎直方著

大正三年秋我が海軍の領ミクロネシア占領の後、同年十二月より四年に亙り、前後數向各方面の學術的探檢隊派遣の事あり。著

者は即四年四月より前後八旬彼地を巡檢せられ、地理學上より見たる南洋を極めて平易に、且手短かに一般讀書の爲めに紹介せん」として、東京朝日紙上に連載せられたる南洋一瞥と、二篇の講演とを輯みたるものなり。

南洋一瞥に於ては、諸島特に珊瑚礁の成因と其景觀、風土、植物景觀等を述べ、獨逸測量船プラチツト號を引いて其海洋學上の功績を賞で、引いて附近海底の概況を示されてゐる。又椰子を始めとして有用植物の利を説き、燐礦産出の盛況を察せしめ、土人生活狀態土人の航海と海圖、舞踏、土人の風教、ヤツプ島の石貨と貝貨等とによりて人文地理學上の土人を紹介せらる。獨逸の南洋經營と我が施設の條に於ては徐ろに邦人の奮起を促し、歸航の船中鹿兒島丸等の條に於ては航海上の事情を躍如たらしめてある。

太平洋に於ける、歐洲人士の探檢時代より、英佛兩國の爭奪時代に至る、西、蘭、英佛諸國の活動を示せる「太平洋に於ける列強勢力の消長」と、獨逸が目下日英兩國の分占せる太平洋上全獨逸の獲得の事情經過を説ける「南洋に於けるドイツ領土獲得」の二篇は歴史地理的に南洋を知る事を得べし。更に挿入するに十數葉の寫眞を以て「一斑を髮翫たらしめ」たり。

近時我が南洋に關して、二三の單行本も表はれたれど學術的而も地理學上より見たるもの他に一も之なし。特に中等教師の好同伴

として推奨す。(廣文館發行、定價一・二〇)

●支那政治地理誌 下卷 大村欣一著

著者は東亞同文書院に教授たる人、本書上巻は先に刊行せられたるが、其下巻は昨年十一月世に表はれぬ。中央政府の内外情に筆を起し、内國公債、民國の新稅、人口及民族、度量衡、貨幣、金融機關、外國銀行等、政治地理、經濟地理學上の諸問題を編述せるが、其後の支那既成鐵道と豫定鐵道及び外國所有鐵道の三章の如きは、一般地理學より見て、特に重要な參考資料なり。各方面より見て最も密接の關係ある支那に就て、政治地誌として上梓せられたるもの殆ど他に類例なき點より見るも、此書の資料としての位置も解せらるべし。(丸善株式會社發行、定價二・五〇)

●Clarke, F. Wigglesworth; The Data of Geoc-

hemistry Washington 1908 171650

北米合衆國地質調査所の一事業として著者がものしたる本書は、Geochemistry のふも、實は Chemical Geology である。

十九世紀中葉、獨逸の Bischof 氏が、地質學は野外實地の研究に依らずして、實驗所に於てなすべき範圍廣くとして「Chemische Geologie」を公表し、一八八〇年 Justus Roth 氏が、更に新なる材料を蒐集して、礦物の自然的分解、岩石の變化等を研究してより、地質學の化學的研究漸く興り、かくて、ミュンヘン大學教授

にして化學的礦物學の泰斗 Groth 氏の「Chemische Kristallographie」……英譯の小冊もあり……著はれ、Doelter 氏の岩石の化學的研究を見るに至りぬ。

然れどもビショーフ氏の研究は、其對象の範圍は廣けれど、時代は古く、以後の研究家の對象は、岩石礦物に限られ、未だ會て、クラーク氏の本書の如く一般的なるものあるを見ず。

全篇所として注意を惹かざるはなけれど、就中氣界、湖河、海洋陸内盆地、鑛冷泉及溫泉等、第二章より第六章に至る各章は、地理學上より見て、一般的に特に興味深く、其他、鹽類、火山瓦斯岩漿、岩石成分たる礦物、火成岩、岩石の分解、水成岩、接觸岩石、金屬礦物、石油、石炭等重要にして興味ある種々の研究を發表せり。

地質學一般の進歩上、極めて夥多の材料ある合衆國に於て、此等を廣き範圍より總括したる本書の如きは、其他の地質學書に比して、著しく出色あるものといひべし。

●Daly; Origin of Igneous Rocks

亞米利加に於ける岩石の研究は、近時顯著なる發達を呈せり。本書も亦亞米利加本の一なり。

岩石分類法に關して、亞米利加の斯學者は、從來獨逸、佛蘭西、英吉利等歐洲學界にて、盛に行はれたる造岩礦物の種類によりて

岩石を分類せんとする定性的方法 (Qualitative Method) の不完全なる點を攻撃して、新なる定量的方法 (Quantitative Method) を採り。然れども、此方法の化學的分類法は、實際充分に適用し難き場合多きが故に、著者デーリは亞米利加流の分類法に反對し、一、從來の方法を本として、從來岩石學上に行はれたる種々の假定説の折衷法 (Eclectic Method) に依り、火成岩が地下に岩漿となりて伏在せる場合より、種々の形狀となりて噴出するを説明せり。二、從來の岩石學は、其成因に溯り、それを根據として、岩石の自然史を、生物のそれの如くに取扱ひたるは其例甚だ少なかりき。尤此方面の研究にて纏まりたるものなる、英國の Harker の Natural History of Igneous Rocks には、斯くの如き傾向は之を認め得るも、然も其 Literature は甚だ少し。此故に、デーリの本書は此方面に關し、岩石研究の現在の進歩に依りて得たる結果を概観する事を得るものにして、此點より見れば本書は確に現代唯一の書といひつべし。

三、火成岩は、噴出するに際し、火成岩其ものにも、亦其周圍の水成岩にも、變性 (Metamorphism) を及ぼすものなるが、之に關しては、從來學者間に、二様の見解あり、現在歐米を風靡せる獨逸の Rosenhusch の説は、火成岩は變性に際しては、物質交換 (Chemical Interchange) 起らずといふものなるが、之に對して、佛

蘭西の L'vy, Lacroix 等は之に反對して、此際物質交換起ると主張せり。ラクロア等の説は、或範圍まで認識すべきものなるも、從來一般に認められざりき。素、獨逸には小規模なる花崗岩等の噴出の外大規模の火成岩塊なく、佛蘭西にては、アルプス、ピレンテ一等、大規模の火成岩地域ありて、多大の材料を提供せるが如き差異は、學說相異の根本原因となりしにあらざると思はる。而して、デーリは、亞米利加の豊富なる材料により、佛國學說も參考して、噴出の場合には、周圍の物質が落込み、之が熔けて、岩漿の中に入る事を論ぜり。以上は本書の三大特質といふべし。又氏は地殼の構造を三別して、一、水成岩皮殼、二、花崗岩皮殼、三、玄武岩皮殼と想像し、玄武岩は高熱にて、最深處より噴出するものなるが、其周圍の岩石を熔かし、同化作用を成せりとする。從來の學說に比して、奇抜なる創見も發表せり。

● Bryant, W.W. ; A. History of Astronomy  
London. 1907

天文學發達の概畧を述べ、彗星、食、觀測機械、觀測法、太陽、月、地球其他遊星等に關して歴史的説明を下せるもの、冗長に流

れず、専門的に偏せず、一般讀者の爲めに受け入らるゝやう、上代より現代に至るまで、天文学上の發達の歴史と天文学上の貢獻者とに就きて書き流されたるを長所とす。

貢獻者の肖像觀測機械觀測所等より、天體及同現象に關する鮮明なる寫眞をも挿入せり。

●First, W.A. ; A. Guide to South America

London 1915 ¥300

著者は軍籍に身を置ける人にて、南米に居たる緣故より、先には「アルチエレンチン」を著はせり。本書はクオリアナ地方を除く南米とバナマ運河とに關して、其現狀を知らしめんとの趣旨にして、歴史と地理と南米と離すべからずとて、此中に含めたるバナマ運河に就きては、其歴史を述ぶるも、其經濟上其他の價値等に對する意見なきは、物足らずといふべし。されど一般自然地理と人文地理、殊に經濟地理を主眼として、各國の概況を述べたり。各國一葉づ、附けたる挿圖は粗末に、其統計も一九二二年までのものなれど、各國國狀の一般は窺ひ得べし。其參考書に乏しき南米の事なれば、簡單なるものとして參考書の一に加ふべきものなり。

●Bury, Bishop ; Russian Life To-Day

London 1915 ¥200

著者は平國の僧侶なり。教會の用務を帯ひて、露西亞本國及び西部

西比利亞を旅行し、其見聞調査に依つて、露西亞政府の組織、行政狀態や露西亞人の生活狀態及び西比利亞の經濟的發展等を紹介し、特に其職責たる露西亞教會に就きて其所見を披露したるものなり従つて純地理學上の作品と見る事の妥當を欠くの觀あるはいふ迄もなれど、興味ある地理學上の材料は、此等の著書によりても求め得らるゝ事を記せざるべからず。

●雜誌、新聞

史學一般に關するもの

(雜誌及新聞名は略號を) (用ふ略號表末尾に添ふ)

- 桑田 芳藏 文化發達の心理學…………… 哲雜(三四七)
- 坂口 昂 時代の趨勢と史家の任務…………… 史林(一一一)
- 傳記 懷史に關するもの (朝鮮史を含む)

- 飯島 茂 懷良親王の御事蹟に關する二三の考…………… 歴史(二六ノ六)
- 石川二三造 小山春山先生傳…………… 弘道(二八五)
- 伊木 壽一 伊達政宗の文事…………… 國院(二二ノ一二)
- 上領 三郎 織田信長と基督敎…………… 歴史(二六ノ六)
- 大西 源一 野呂元丈傳…………… 三史(五ノ一二)
- 高槻未知生 關醫高良齋…………… 史雜(二六ノ一二)
- 長尾 素枝 僧德最中に就いて…………… 國院(二二ノ一二)

林 森太郎	壺井鶴翁に就いて……………	史林(一ノ一)	三浦 周行	即位禮及大嘗祭について……………	京教(二八二)
土方 恕平	川俣茂七郎の事……………	弘道(二八五)	宮川 宗徳	徳川時代に於ける對外貿易始末(國院(二二一、二〇))	
辨田 岩造	即位禮と竺雲兩禪師……………	禪宗(二四八)	宮地 直一	八十島神祭の考……………	國院(二二一、二〇)
村田峯次郎	大村益二郎先生……………	世界(一三八、三九)	八代 國治	御大禮の意義……………	國院(二二一、二〇)
政治	軍事、法制、經濟、社會		山本 信哉	祈年祭と大嘗祭……………	國院(二二一、二〇)
石卷 冥夫	徳川時代に於ける伊勢神宮の遷宮……………	國院(二二一、二〇)	山本徳三郎	熊澤蕃山と近世の林業……………	山林(三九八)
安藤 祐專	保科正之の宗教政策(下)……………	歴史(二六ノ五)	山田 壽藏	臺灣變亂史……………	臺月(一〇ノ一)
植木直一郎	御大禮要義……………	國院(二二一、二〇)	和田 英松	平安朝以來行はれし即位式の由來……………	國院(二二一、二〇)
内田 銀藏	本多利明の船舶論……………	海公(五ノ一)	宗	室町時代の禪宗に就いて……………	禪宗(二五〇)
岡部 精一	東京寛都の真相……………	歴史(二七ノ一)	大屋 徳藏	多聞院日記より見たる安土桃山時代の佛教……………	無燈(二一ノ一)
大類 伸	城郭論……………	東日(一月一日)	同	赤山明神考……………	郷研(三ノ一〇)
岡村 利平	加賀國大一新撰小探動亂と飛騨國白川照蓮寺……………	飛史(二ノ二)	岡崎 清安	親鸞上人の非僧非俗……………	六學(一七一)
川本 達	對馬の民族南朝九條氏の變綱福氏(榎谷氏)對隣烈事……………	世界(一四〇)	是山 惠覺	スメラミコト考……………	國院(二二一、二〇)
川上 多助	莊園の起源……………	歴史(二六ノ五)	佐藤仁之助	我邦中古の救恤事業と佛教……………	六學(一七一)
喜田 貞吉	武士を東夷といふ事の考(下)……………	歴史(二七ノ一)	富井 隆信	大黒天考……………	史雜(二七ノ一)
白鳥 庫吉	大嘗祭の根本義……………	國院(二一ノ一〇)	長沼 賢海	ふびす考(三)……………	史雜(二六ノ二)
辻 善之助	南洋に寶を求めたる末吉船……………	學生(七ノ一)	同	經津主武甕槌神名考……………	國院(二二一、二〇)
藤田 精一	叡山前の役……………	歴史(二七ノ一)	福田 樂浪	天照大神は現人神なり……………	國院(二二一、二〇)
三浦 周行	應永の外寇……………	史林(一ノ一)	森 林助		

三田 文昭 大谷本廟創立考(八完)……………無燈(二〇ノ二)

脇谷 攝謙 我國僧者の佛教觀……………禪宗(二四八)

教育學藝

井野邊茂雄 蘭學の起源……………歴史(二六ノ五)

澤村專太郎 本邦畫場に及ぼせる西  
洋版畫の影響(承前)……………國華(一 月)

白水 生 後水尾院天皇御製……………禪宗(二四八)

高橋 勝弘 伊能氏の古今戸口考……………統集(四 一九)

八代 國治 金澤文庫……………國院(二一ノ二)

人種

新居勝三郎 考古學、風俗  
朝鮮の石器發見及調査報告……………人類(三〇ノ二〇)

池内 宏 李朝の四祖の傳説と其構成……………東學(五 〇)

猪狩 又藏 蛇族論……………國院(二二ノ一)

今西 龍 朱蒙傳説及老獺雅傳説……………藝文(五ノ二一)

梅原 未治 越前敦賀郡松原の金石文……………考古(六ノ四)

小川 榮一 美濃金石文再追補……………考古(六ノ四)

同 美濃國石塔婆追補……………考古(六ノ五)

同 美濃國に行はる、俗説と舊觀……………人類(三〇ノ二二)

小野 玄妙 東大寺盧舍那佛の右  
脇待虚空菩薩阿私考……………考古(六ノ四)

大野 雲外 本州發見の石鐮の形式……………飛史(二ノ三)

同 アイヌ語會話篇……………人類(三〇ノ二〇)

同 先住氏とアイヌの紋線に  
同一性質を現はしたる例……………人類(三〇ノ二二)

同 玉類齋發及び彌生土器を  
混出する石器時代の遺蹟……………人類(三〇ノ二二)

同 河内國長谷山の古陶窯附中山の  
古窯に就て岩井君の示教を請ふ……………考古(六ノ三)

同 朝鮮語と滿州蒙古語との關係……………朝鮮(十月十一月)

同 足利在銅佛像三體……………考古(六ノ四)

同 奈良の毘盧舍那佛大銅像……………日本(六七〇)

同 アイヌ古代風俗の研究に就て……………人類(三〇ノ二〇)

同 鍋と釜……………考古(六ノ三)

同 硯の形態及び名稱に就て……………考古(六ノ五)

同 南嶽寺の遺蹟……………禪宗(二四八)

同 常陸國福田介墟篇三……………人類(三〇ノ二〇)

同 土俗覺帳……………人類(三〇ノ二〇)

同 太古の大和民族と土蜘蛛……………考古(六ノ四)

同 古墳發掘の所謂神獸鎮を論じて  
佛教渡來前の宗教思想に及ぶ……………考古(六ノ五)

同 古瓦類雜考……………考古(六ノ四)

同 畸形的小葉を有せる  
疏瓦當蓮華紋……………考古(六ノ三)

中山平次郎 古銅錢研究の新材料……………考古(六ノ三)  
同 古瓦離考二……………考古(六ノ五)  
西郡原古墳調査附 百塚原古墳出土器……………考古(六ノ三)

原田 淑人 古墳の名稱……………考古(六ノ五)  
一枚齒 齒が生た産れ兒……………人類(三〇ノ一二)

丸山太一郎 磬一罌口一茶吉尼天……………考古(六ノ五)  
同 武藏國分寺古瓦に就て……………考古(六ノ四)

南方 熊樹 寛平六年の罌口に就て……………考古(六ノ三)  
同 寛平の罌口と雲版……………考古(六ノ五)

住田 正一 古鏡の銘に就いて(一)……………人類(三〇ノ一二)

沼田 頼輔 アイヌの天地山水説話……………人類(三〇ノ一二)

山田 孝雄 史料、古文書、朝綱(十一月)  
吉田 慶 朝鮮文獻の分類……………史雜(二六ノ一二)

浅見倫太郎 日本朝鮮の交通に關する勝録に就いて……………朝鮮書籍解題……………東洋(二〇五—二〇六)

今西 龍 鹿苑日録考……………禪宗(二四九)

白石 芳留 今昔物語補遺……………藝文(六ノ一二)

鈴木 三七 東洋史に關するもの  
通史、時代史、地方史、年表

田中實太郎 支那歷朝帝位纂奪史……………中公(三〇ノ一二)  
内藤虎次郎 高昌國の紀年に就て……………藝文(六ノ一一)

桑原 隲藏 支那の紀年……………記  
子ストル教の僧及烈に關する逸事……………藝文(六ノ一一)

同 宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚に就て……………史雜(二七ノ一二)

橘 惠勝 釋尊の人格……………東光(二〇ノ一二)

中村久四郎 張窳の事蹟及び人物評論補考……………史雜(二六ノ一一)

安井小太郎 王陽明と論語(上下)……………東研(五ノ一二)

吉田 東伍 明末の袁崇煥と清に代れる袁世凱、兩袁の朝鮮に……………歴史(二七ノ一一)

羅振 玉 附與すべき感動如何……………國叢(一九)

政治、軍事、高士傳……………國叢(一九)

内藤虎次郎 支那將來の統治……………大朝(二月廿九日ヨリ)

後藤 庸堂 姑蘇城外に於ける倭寇……………史雜(二七ノ一二)

白鳥 庫吉 支那時局觀……………東時(二〇八)

中村久四郎 歴史と道德より觀たる支那の帝制問題……………東研(六ノ一一)

羽田 亨 「再び遼金時代の亂軍に就いて」を讀む……………史雜(二七ノ一一)

林 泰輔 羅王二氏の王質に關する答書……………東研(五ノ一二)

山上 天川	印度の將來如何……………	讀賣(十二月四日ヨリ)	狩野 直喜	支那俗文學史研究の材料(上下)(藝文(七ノ一三))
王 國維	生霸死霸考……………	國叢(二〇)	富岡 謙藏	眞本貞觀政要考……………
教育、學藝			中村久四郎	同上(六ノ一一)
小柳司氣太	明代の哲學思想……………	東研(五ノ一二)	藤田 豊八	算學啓蒙と元代の關稅及び物價歴史(二七ノ二)
佐賀 東周	看過せられたる支那文學の一面(藝文(七ノ二))		島夷志略校注……………	國叢(七ノ八、九)
關野 貞	山東省に於ける南北朝及び隋唐の彫刻……………	國華(三〇八)	星野 恒	春秋と左傳(上下)……………
人種、考古學、言語、風俗、遺物				東研(五ノ一二)
翁 大年	陶齋金石文字跋尾……………	國叢(一九)		泉涌寺の高麗板大藏經……………
新村 出	國語及朝鮮語の數詞について……………	藝文(七ノ二)		大毎(十二月十日ヨリ)
常 茂徠	洛陽石刻錄……………	國叢(二〇)		
鈴木 虎雄	周詩に見えたる農桑……………	藝文(六ノ一一)		
鳥居 龍藏	朝鮮の看板……………	大毎(十二月廿日)		
中村久四郎	菩薩變考……………	史雜(二七ノ一)		
堀 謙德	支那譯場の組織……………	六條(一七)		
羅 振玉	海外貞珉錄……………	國叢(一八)		
同	三韓家道文目錄……………	同上(一八)		
同	洛陽存古閣藏石目……………	同上(二〇)		
王 國維	古禮器略說……………	同上(一九)		
石濱純太郎	群書治要と尙書義典……………	東研(五ノ一〇、一一)		

Journal of the Royal Asiatic Society.  
October 1915.

Articles.

G.T. Harley: Jahiz of Basra to al-Fatih ibn Khaqān on the "Exploits of the Turka and the Army of the Khalifate in general."

F.F. Pargiter: The Telling of Time in Ancient India.

Oric Bates: Ethnographic Notes from Marsa Matrūh.

J.F. Fleet: Tables for finding the Mean Place of the Planet Saturn.

Miscellaneous communications.

B. Laufer: The prefix a- in the Indo-chinese Languages.

B. Laufer : Karajang.

Berriedale Keith : The Indian Origin of the Greek Romance.

Berriedale Keith : The Magi.

Berriedale Keith : The Dynasties of the Kali Age.

Vincent A Smith : The Zoroastrian Period of Indian History.

B.M. Baura : A Note on the Bharata Edict.

Clara C. Edwards : History of the Dome in Persia.

Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes.

Band XXIX.—Hef 1—2. 1915.

Ch. Bartholomæ : Mitteliranische Studien V.

H. Torczyner : Ein Psalm, Über den Tod.

N. Rhodokanakis : Reduplikation und Vokalbildung.

M. Schorr : Ein Anwendungsfall der *inspector ventris* im althabylonischen Rechte.

F. Bork : Die Purūgas als Geschichtsquelle.

R.O. Franke : Der einheitliche Grundgedanke des Majjhimanikāya : Die Erziehung gemäss der Lehre (Dhamma-vinaya).

M. Winternitz : Die Witwe im Veda.

A. Fischer : Eine Maqriz-Stelle.

J. Charpentier : Die Hähigunphā-Insehrift des Khāvēla.

F. Hestermann-Modling : Die nichtchinesische Schrift der Lolo in Yünnan (Südwestchina).

圖書目録

- 桑田 藤藏 佛國に於ける社會黨徒の沿革 國家(三〇) 月)
- 坂口 昂 獨逸の東方策及ら研究……………大朝(一)
- 同 羅馬法王……………大毎(一)
- 同 ミツキエ君ソチの最後の日……………藝文(七)
- 高島佐一郎 (スタニスラウ・ウサチ)
- 高橋誠一郎 第十九世紀に於ける獨逸……………三田(九)
- 寺田 四郎 經濟發達の一斑(四、五)……………三田(九)
- 内藤 智秀 トーレン・マン及其時代(三、四)三田(九)
- 吉野教授のクロノ……………國際(一四)
- シア問題を評す……………國際(一七)

- 長岡 春一 歐洲大戦勃發前後の列強外交(一、二)
- 新渡戸稱造 瀛洲土地問題の由來(一、二、三) 國家(四、五、六、七、八)
- 原 勝郎 大戦外交史上の論争點(一、二、三、四、五)
- 松崎 壽 獨逸外交政策の今昔(一、二、三)
- 前田 太郎 獨逸家族名の成立 要素及其の實例 人類(四〇、四一)
- 箕作 元八 近東に於ける獨佛外交の今昔比較論 外時(二三、二四)
- 村川 堅固 獨逸先帝の陣中日記に就いて(一)
- 吉野 作造 墨西哥紛亂の今昔(六) 國家(一九、二〇)
- 露國宮廷秘史(八、九、十) 世界(一三八、一三九)

The English Historical Review.

- Vol. XXXI. No. 121, January 1916
- Reginald L. poole** : The See of Mairienne and the Valley of Susa.
- William A. Morris** : The Office of Sheriff in the Anglo-Saxon Period.
- Mrs. Eric George** : Notes on the Origin of the Declared Account.
- W.F. Reddaway** : King Christian VII.

第一卷 紹介 新聞雜誌

The American Historical Review.

- Vol. XXI. No. 2 January, 1916
- H. Morse Stephens** : Nationality and History.
- Lynn Thorndike** : The True Roger Bacon, I.
- William Smith** : The Colonial Post-Office.
- G.W. Daniels** : American Cotton Trade with Liverpool under the Embargo and Non-Intercourse Acts.
- D.P. Barrows** : The Governor-General of the Philippines under Spain and the United States.

Revue Historique.

- 40e Année. Tome CXX. Novembre-December 1915.
- Maurice Wilmotte** : Une nouvelle theorie sur l'origine des chansons de geste.
- Rod. Reuss** : Le sac de Pfloret-de-Ville de Strasbourg (Juillet 1789). Episode de l'histoire de la Revolution en Alsace (Suite et fin).
- Paul Robiquet** : Le général de Galbois (1778-1850).

Deutsche Geschichtsbiliter.

- 16. Band September-October 1915 9/10. Heft.

第一號 一七十一 (三六二)

Gustav Boerner : Die Bildung slawischer Ortsnamen.

小藤文次郎

日本列島及朝鮮半島地體誌(三)地震 地質(二六七)

Ludwig Steinberger : Zum Itinerar Kaiser Graf-

同

日本の火山 同(二六八)

ans im Jahre 379 n. chr.

地理學に關するもの

自然地理學一般

石田 雅生 冬期氣温の長期的豫報(日本) 氣象(三五ノ二)

大地 四郎 井水の温度 同(同)

小野 庄造 距離測量の檢閲法及正面射と斜射との比較に就て 階行(四九)

佐藤 博藏 湯の華 地學(毛ノ三二四)

佐藤 進三 白金抵抗寒腰計による地中温度の測定 氣象(三五ノ一)

高山 四郎 氣温が永點下の時の降雨に就て 同(同)

ザントシネ トロエーム 地球自転と摩擦との爲に風向の變する事 同(同)

中村左衛門太郎 震波の主時曲線に就て 同(三五ノ二)

平野 烈介 颯風服(一)觀測實況 同(同)

古 竹 生 世界最古の木村 山林會(三九八)

山崎 直方 地層中の氷層に就きて 地質(二六九)

山本徳三郎 母岩及氣候と土性 山林會(三九九)

木村 六郎 山口縣藏目喜鑛山に就ける接觸變質の交代鑛床に就て 地質(二六九)

島岡亮太郎

陶山誠太郎

鶴見左吉雄

藤島信太郎

星 建之介

松本 秀治

矢次 萬六

村 田 生

横山又次郎

飯田 義一

石塚 英藏

井上禧之助

同

人文地理學一般

鐵道運輸の根本的觀念及其運用 海國(五ノ一)

鑛業の要旨 朝彙(大正五年三月)

世界に於ける鐵鑛井に於ける地質 地學(毛ノ三二四)

石炭の分布及供給如何 地學(毛ノ三二五)

同 日鑛(三三三)

猪狩 又藏 蛇民族論……………國學(二二ノ一)

小川 琢治 戰爭の地理的意義及其の研究に就て……………地學(六ノ三二五)

後藤 正治 金銀及鉛より成る合金に就て……………日鑽(三七二)

齋藤 大吉 内外の製鐵事業に就て……………工業(一三ノ一)

清水 省吾 石炭の主産物及副産物……………地學(六ノ三二五)

豊永 眞里 興業資料……………朝葉(大正五年一月)

中村 恒 紙の話……………中央(三一ノ三)

地方誌

(日本)

青木 盛一 岐阜にて見たる暴風の眼に就て……………氣象(三五ノ二)

飯島 純介 朝鮮の金鑛業……………朝葉(大正五年一月)

大關久五郎 梓川溪谷島々附近の地形に就て……………地學(七ノ三二四)

同 再び信州島々附近梓川溪谷の地形に就て……………同(六ノ三二五)

同 梓川上流上高地盆地附近の地形に就て……………地質(二六九)

小倉 勉 沼田臺地地質調査報告……………同(同)

神戸 正雄 海國としての日本……………海國(五ノ一)

海運上より見たる長崎と門司……………工業(一三ノ二)

製鐵所の最近狀況……………同(一三ノ一)

海運上より見たる九州の石炭狀況……………同(同)

全國米實收高(大正四年)……………農會(四一六)

國語及朝鮮語の數詞について……………藝文(三月)

新村 出

野田勢太郎 支那浙江省海岸地域の地質……………地質(二六八)

阪東 太郎 支那の鐵道……………工業(二ノ二)

支那の製茶輸出獎勵……………農會(四一六)

(亞細亞洲)

神田 禮治 緬甸國鑛山視察旅行談……………日鑽(三七一)

サラ、チャンドラダース、西藏探檢概要……………地學(六ノ三二六)

三山喜三郎 比律賓群島に就て(承前)……………同(七ノ三二四)

印度に於ける滿鐵鑛業……………日鑽(三七二)

(歐羅巴洲)

アツベ ウカシントンミバリの冬……………氣象(三五ノ一)

小野 武夫 戰時に於ける獨逸の農業……………農學(四一七)

小出 房吉 獨逸林業界の現勢(第六回)山林會……………(三九九)

ラッザース シェー、スト 農業上より見たるイングラント及ウェールズの地質(未完)……………地學(六ノ三二五)

露國新關稅法と本邦輸出農産物、農會……………(四一六)

(亞米利加洲)

片岡 謙

ブラジルの農業……………地學(六ノ三五—六)

武田 醇霞

熊澤蕃山先生の墳墓に就て……………考古(六ノ四)

同

ブラジルの農業概察談……………農會(四一五—六)

關野 貞

百濟の遺蹟……………考古(六ノ三)

ロ州地方農業概察談……………農會(四一五—六)

菅 富太郎

伊豫に於ける古き密柑の栽培地伊史(一ノ冬)

(濠洲及太平洋)

米國輸出密柑の對容器解決……………農會(四一六)

後藤 肅堂

小石川切支丹屋敷……………歴史(二七ノ一)

岡村金太郎

クロリン群島、マリアナ群島、産海藻目錄……………植物(大正五年二月)

山崎 信之

大黒山島……………朝彙(大正四、十月)

黒 田

南洋産島類の二新亞種……………動物(一)

長南倉之助

攝州平野の含翠堂……………歴史(二六ノ六)

(太 西 洋)

ゲルハルト、シオント氏大西洋論の梗概……………地學(六一—三二五)

藤井甚太郎

對馬見聞談……………歴史(二六ノ五)

田中阿歌麿

西川 玉堂

大和を中心とする太古遺跡の視察と研究……………世界(一三九)

歴史、地理

直番郡考……………史林(一ノ一)

大和國宇陀郡に於ける神武東征軍古蹟視察(七)

國院(二二ノ一)

今西 龍

シラの島及ゴレスに就きて……………藝文(七ノ二)

本多辰治郎

兼山先生と土佐の林業……………山林(三九八)

内田 銀藏

伊豫海奴沿革略史……………伊史(一ノ冬)

牧 綠山

廣島五箇庄に就て……………尙古(六ノ三)

景浦 直孝

漢委奴國王印の出所に對する遺蹟學的研究……………考古(六ノ五)

三井 大作

再び藤原不比等の墓所に就て……………考古(六ノ四)

笠井 新也

藤原不比等墓所考……………歴史(二六ノ五)

谷井 濟一

(支那及西域)

喜田 貞吉

多武峯墓に就きて谷井氏に答ふ考古(六ノ五)

飯島 忠夫

禹貢の衡山の位置に就きて(下)東研(五ノ一二)

同

東大寺と國分寺附金鐘寺の疑問藝文(七ノ一)

池内 宏

遂代混同江考……………東學(六ノ一)

同

東大寺と國分寺附金鐘寺の疑問藝文(七ノ一)

池内 宏

遂代混同江考……………東學(六ノ一)

栗田 元次

城下都市として江州八幡町……………歴史(二七ノ一)

池内 宏

遂代混同江考……………東學(六ノ一)

小川 琢治 崑崙の西王母(上、下)……………藝文(七)ノ一(二)  
 白鳥 庫吉 大宛國考……………東學(六)ノ一)  
 島山 喜一 山東のふるゝ……………東研(六)ノ一)  
 宮川 仁藏 山東の天地……………明聖(四)ノ一)  
 和田 清 定安國に就て……………東學(六)ノ一)  
 雲貴の人文研究……………東日(一月三十日)

雜

喜田 貞吉 シヤアの赤色を好む事……………郷土研究(三)ノ一(C)  
 會川 生 旅行雜譚……………郷土(四)ノ一(二)  
 翠 操 生 歴史と地理……………教養(一〇)ノ二(三)  
 高清水菊太郎 茶臼山目錄……………同(三)ノ一(二)  
 新渡戸稻造 櫻島罹災民の新部落……………同(三)ノ一(〇)  
 宮崎 貴尋 歐米航途通信……………海國(五)ノ一)  
 唯 空 生 帆船環遊記……………同( )ノ )

Royal Geographical Journal

November XLVI No 11 1915

Gana, Frank R. ; The Sahara in 1915  
 Davison, Charles ; Earthquakes in Great Britain

(1889-1914)

Geography at the British Association

第一卷 紹介 新聞 雜誌

Water Supply and Irrigation in Australia

January XLVII No 1 1916

A. R. H. ; Jeremiah Dixon's Theodolite.

Metcalfe, Charles ; Railway Development of Africa,

Present and Future.

Sharpe, Alfred ; The Kivu Country.

Markham, Clements R. ; Sir Allen Young.

Gorney, B. Glanvill ; A Voyage of the Spanish

Brigate "Santa Rosalia" in 1774

Ward, F. Kingdom ; Notes on a Journey across

Tsa-Rung.

Walls, B. C. ; A Measure of Civilization.

The National Geographical Magazine

December 1915

Whiting, John D. ; Jerusalem's Locust Plague.

Alaska's New Railway.

The Nation's Pride.

Die Geographische Zeitschrift

Oktober 1915

第二號 一七五 (三六五)

**Greim, Von Prof. Dr. Georg** ; Corsica.

Eine länderkundliche Skizze nach eigenen Beobachtungen und der Literature.

**Beckers, W.J.** ; Die ältesten Nachrichten über Britanien.

**Gradmann, Von Prof. Dr. R.** ; Das Problem der Klimaveränderung in geschichtlicher Zeit.

November.

**Kretschmer, Von Prof. Dr. K.** ; Belgium.

**Sapper, Von Prof. Dr. Karl** ; Die deutschen Südschwebungen.

The Scottish Geographical Magazine

No. 1. 1915

**Ghisholm, Geo. G.** ; Geography and the Course of the War.

**Tyrrell, G.W.** ; The Whangie and its Origin.

**M. Farlane, John** ; The Barrinjack Dam and the Murrumbidgee Irrigation Area.

The Geography of the Battle of the Marne.

Proceedings of the Royal Scottish Geographical Society.

Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde

Zu Berlin

No. 8. 1915

**Krebs, Norbert** ; Oesterreich-Ungarns Küstensaum.  
**Partsch, Josef** ; Richard Kiepert.

Annales de Géographie 1915

Novembre, No. 131—XXIII—XXIV

**Lugeon, Maurice** ; Le sriage du lit fluvial.

**Germain, Louis** ; L'origine et la distribution géographique des faunes d'eau douce dans l'Amérique de Nord.

**Haumann, Emile** ; Le pays dinarique et les types Serbes.

**Adam, J.** ; Le Djeloff et Le Ferho.

◎雜誌新聞名略號表

伊史 伊 豫 史 談 大 朝 大 阪 朝 日 新 聞  
大 每 大 阪 每 日 新 聞 隨 行 隨 行 社 記 事

